

ミネソタ州立大学マンケート（MSU）校短期留学報告書

大阪医科薬科大学
看護学部看護学科 2年
渡邊 優太

今回のミネソタ短期留学の中で、様々な経験をさせて頂き、学ぶことが出来ました。また、毎日が英語漬けの日々だったということもあり、英語力を向上させることも出来たと思います。毎日、新しいことの発見と多くの刺激に触れることができ、充実した毎日を送ることが出来ました。

正直、日本を出国する時、海外で看護の勉強が出来るという楽しみな気持ちもありましたが、反対に言葉の壁やちゃんと自分で生活を送っていけるのかという不安もありました。ただ、私の夢はアメリカでナースプラクティショナー（NP）の資格をとり、経験を積んだ後、国際看護師としてNPOなどに参加し世界で働くことです。なので、不安に負けず積極的に行動しようと思いました。なかなか授業についていくことや、ネイティブスピーカー同士の会話についていくことは難しかったですが、徐々に内容を聞き取ることが出来るようになっていくごとに嬉しかったことを覚えています。

今回の留学では、マンケートだけではなく、地方の病院やクリニック、高齢者施設薬局、消防署など10ヶ所以上の施設を周り見学させて頂きました、そこで働いている方々にお話を聞かせていただくことが出来ました。日本にも同じような施設がありますが、日本と同じようで全くことなつた環境や仕組みがあり、とても興味深く面白かったです。日本と比べて違うことの方が多かったですが、同じような問題を抱えていることも多かったです。過疎化している地域では、消防署がなく救急車が車で1時間近く掛かってしまうこと、貧困家庭では医療費が高く十分な医療を受けられないことなど似たような問題も多かったです。

大学が春休みの間には病院とクリニックの2ヶ所に実際に病院実習に行かせて頂きました。3日間の実習で短い間でしか多くのことを学ぶことが出来ました。アメリカの看護はやはりすごかったです。日本よりも「看護」が進んでいました。日本よりも看護師に対して地位の確立や看護師自身の判断で行える行為が多く、日本のように「診療の補助」ではなく、ある意味医師のようでした。実際に2ヶ所のうち1ヶ所のクリニックには医師がおらずNPが開院していました。また、日本よりも患者と医療従事者との関係が近く、密にコミュニケーションを取っており、なんでも話すことができる環境を作っていました。アメリカではほぼ自由診療で行っていることもあり、インフォームド・コンセントが重要とされていました。病床に入ると看護師は自分の名前を言っていたり、処置の際には「何をするのか」、「何のためにするのか」を患者が納得いくまで詳しく説明していたことが印象に残っています。

またミネソタ州立大学マンケート校で、実際に看護学部の生徒と一緒に授業を受けることができ、シミュレーションなどの見学をさせて頂くことが出来たことも大きな経験に

なっただと感じています。日本の大学よりももっと自発的に授業に生徒が参加し、生徒中心に授業が行われていました。日本と全く違う環境に身を置き、授業を受けることができ、とても楽しく、面白かったです。積極的に授業の中で、一人一人が意見を出し合い、授業に関わり、答えを見つけていこうとするその姿勢には、ただ単純にすごいと尊敬する部分もあり、なかなか日本の大学の授業では難しいかもしれませんが、自分自身もこのような形で授業に取り組んでいきたいと思いました。

今回の短期留学で、数えきれない程の経験と学び、思い出を作ることが出来ました。最後になりましたが、関わっていただいたマンケート校の先生方、大阪医科薬科大学の先生方、ホストファミリーの方々には本当に感謝しています。ありがとうございました。

